

くるぞと勇ましく」の軍歌を唄ってくれました。
この集落の人たちには、日本軍は良い事を行い、
好印象を与えたのだ。

別れを惜しんで手製の「日の丸」と軍歌での見
送り。私は、心中深く感謝の礼を申し上げ、手を
振って「さよなら！」と叫んだ。

ラングーン港より宇品へと復員完了です。

遠くビルマの果てまで

福島県 庄 司 武 夫

私は、大正十二（一九二三）年四月十日、福島
県耶麻郡熱塩加納村大字米岡字中川原戊において
生まれました。

昭和十八（一九四三）年徴兵検査で甲種合格、
陸軍の野砲兵となりました。昭和十八年四月十
日、仙台野砲第二連隊第四中隊第四班へ現役入営
です。

私が入営した当時の私の家族の状況は、

父 健在 農林業

母 健在 農林業

長兄 健在 中支へ従軍出征中

次兄 健在 会津鋳業会社従業員

本人 健在 会津鋳業会社従業員

という訳で、私が兵役のため家を抜けることは、
経済的に楽ではなかった。

さて、入営に当たっては戦争初期のような賑や
かで盛んな歓送はなく、実父と二人のみで加納駅
から会津若松―郡山―仙台と列車に乗り、衛門前
で父と別れ第四中隊へ入営。内地部隊には四カ月
間入隊し、ビルマにいた勇第一三〇七部隊へ転属
になりました。

内地にいた期間は要約すれば「根性」で頑張り
通しました。入営前に村の年寄りや兄貴分の在郷
軍人の人々から、種々と軍隊について耳にタコが
できる程、人の嫌がるひどい、つらい生活と言う
ことを聞いていた。何くそ男なら頑張って「根性

のある所を見せつけてやれ」と、心に誓って貫きました。

砲兵隊には馬がつきもの。私は努めて、精いっぱい馬の側に暮らすようにしました。私は馬が好きで馬の世話をするのが楽しみでした。厩にいる時間が多いただけ内務にいる時間が減って、内務の辛さを避けていました。馬も、世話する私の愛情にこたえて、毛艶もよく健康な馬体を示したので、班長さんよりも「庄司を見習え！」と褒められました。砲手、御者を命ぜられました。これぞ禍をもって福となすことを得て、私の心に人に負けぬ自信、誇りを与えられました。

仙台にいた四カ月の初年兵教育期間は、あっと言う間に終わり、南方戦線への派遣となりました。昭和十八年八月、山口県大竹港より乗船。人間のみ乗り、馬や砲はありません。「勇」部隊と「弓」部隊の混成であった由でした。船は今まで見たこともない大きいものでした。四隻で船団を

組み、対潜、対空の見張りを嚴重にして航行し、まず台湾の高雄に寄港。夜を待って出港、数日後フィリピンのルソン島マニラ港へ上陸、ここで数日間滞在の上、タイ国のノンブラドツへ。そしてシンガポールを経てタイメン国境は木薪汽車に乗り通過、最後にビルマのラングーンへ行っただ。この長い移動旅行はちょっとだけ船に乗り楽でしたが、大部分はテクテクと徒歩行軍で大変でした。

熱帯地方で Deng 熱やマラリアに多くの兵が冒されて私も仲良く公平にそれらの病気におつき合いをしました。大事に至らず良かったです。ビルマのマンドレーに着いてやっと原隊の勇第一三〇七部隊第九中隊へ転属されました。

やがてシンガポールに近い南方軍野戦教育隊で下士官候補者の特訓を受け、炎熱に負けず六カ月の教育期間を無事終了、伍長勤務の兵長に進みました。そして小人数で原隊へ復帰しました。

隊へ帰ると同年兵はまだ一等兵の者も多く、古兵でも兵長はいない。勤務年限と階級のギャップからくる対人関係の調和に心を砕くことが多かった。結論は公平に至誠一貫を根気強くして接することでした。

ビルマまで遠征しましたが、あの有名な「インパール作戦」参加も縁なく、砲兵という兵種の故か、後方戦線で荏苒と日を重ねるのみで、作戦参加の労苦もとんと無い状況でした。

昭和十九年、部隊の編成上移動があり、私は第四大隊へ移った以外特筆すべき事ありません。やがて終戦となり、ビルマより仏印のサイゴンまでテクテクと歩いて移動しました。

サイゴンより乗船し、昭和二十一年四月二十六日、大阪入港復員です。大阪で上陸するとDDTを全身真っ白になって消毒を受け二四〇円(?)を支給されて解散でした。

大阪の街は空襲の戦災で物すごく焼け野原と変

わり果て茫然としました。南の遠いビルマより何年ぶりかで内地へ帰ったのだから、内地の人の我々を見る眼は温かいものと勝手に期待しているのに、内地の人はまるで敗残兵でも見るような感じ。戦争中まではなかった、若い男女が手を繋いでいる事。アレもコレもショックの連続でした。

時勢の要求で炭坑夫の経験のある者を早く帰国復員させよとのことで、私もその関係で早く復員ができました。自宅へたどり着いたのは午後二時頃でした。

復員帰宅についての特記事項はありません。

結婚は昭和二十四年十一月十七日。現在夫婦共に元気で、子供は男、女、男と二男一女。孫は三人。皆元気です。

役職は村の区長を二年、農事組合長を四年務めました。その他はなし。

回想すれば仙台を出て大竹より乗船した者は約三十人、私の生まれた故郷の背戸尻から十人出

て、英霊四人、帰国六人と思えます。

戦友会は引き続き開いています。会員は大分少なくなりましたが、今八十人位、砲兵は初め三十人位いたが今は二十人位と減った。

ビルマまで遠征して最も強く印象に残っている事はやはりひもじさ―空腹だろう。軍では食料は自分で調達せよとの命令。ところがどこにも何もない。住民に助けて貰うより外にない。とにかく空腹でした。ビルマと言えばよく話に出てくるのが、敵の弾丸に当たって死傷したのではなくて、空腹、栄養失調、下痢その他の病気で死亡が想像以上に多い。酸鼻を極めた白骨街道、靖国街道に延々と続く日本兵の遺体。中には未だ生きてゐるのに鼻や口からウジ虫が出入りしている光景。この世のものではない惨たらしさ。私も眼をおおおうて歩いたものです。

私が九死に一生を得た貴重な体験を一つ紹介すると、ビルマのマンダレーにいた時の事です。マラリアにやられて野戦病院へ。病院は軍医、衛生

兵、看護婦と沢山揃っているが、ここも食料はない。病院を脱け出て食料を求めて、フラフラと彷徨っている時、現地人の六十歳位の女に助けられた。ちょうど私の母親の年配だ。薄く炊いたお粥さんに名も知らぬ薬草の乾燥したものを小さく刻んでお粥に入れてグツグツ焚き冷したものを、スプーンで横臥している私の口の中へ入れてくれ、眠り込んだ私をそのままそこに寝させてくれて、引き続き看病、看護してくれた。

長いような短いような期間、親切な母親のような老婆に助けられて、そのお陰で私の今日がある。戦後今日まで約六十年近い歳月が流れた。今私がビルマのマンダレー近くの現地へ行く事ができても、既にかの老女はもう生存してはいないだろう。本人が駄目ならその子孫の人に、手厚く謝意を表してできるだけのおもてなしをしたいと思う。昔日本人が沢山ビルマへ行き、迷惑をかけ、逆にまたお世話になった御恩返しをして、対ビルマ友好の礎にもしたいと思うのは私一人でない筈

だ。

今日まで生き永らえた私が子や孫に年寄りとしての一言を訓え残すとすれば、まず「健康第一」ということです。

私共の年代の若い日本人が沢山海外へ遠征して、護国の鬼と化した者も多い。亡き御霊の御冥福を祈り、残された遺家族の御健勝と御多幸を切にお祈り申し上げ、またできるだけのお手伝いをするのは、私共の当然の責任と思えます。

最後に恩欠者としての幕引きに際して、後世の評価に称えられる程の高潔な、誇りの高さを目指し、将来の若い自衛官、国防に命をかける若人の尽忠報國に一点の迷いも生じないような鮮やかな幕引きのあらんことを祈る。

ビルマの初年兵

福岡県 田中 始

私は昭和十八（一九四三）年徴集兵で、甲種合格となり、昭和十八年十二月初旬に久留米の第十八師団（菊）山砲兵第十八連隊に入隊しました。

私の家庭は母、私、妹の三人家族でした。父は五十五歳で若くして死去、姉は私より十歳上で既に嫁いでおりました。妹はまだ小学校二年生でしたから私は非常に心配でした。母は他家の農業の手伝いをして生計を立てておりました。

私は入営までは、伐採した丸太を山から馬に曳かせて道路まで運び出す馬曳きの仕事をしていましたから、馬の取扱いには馴れておりましたので山砲兵になったと思えます。

昭和十九年二月には一期の検閲を終え、原隊が